

様々な困難を乗り越えて国際交流を続けていこう

団長 西野 彰二

1. 尼崎市とアウクスブルク市

今回、尼崎市青年使節団の団長として姉妹都市アウクスブルク市に訪問させていただきました。尼崎市とアウクスブルク市は1959（昭和34）年に日本とドイツの間で初めての姉妹都市提携を締結してから、様々な形で親善交流の歴史を積み重ねてきました。尼崎市からアウクスブルク市への使節団派遣は、2018（平成30）年以來、実に6年ぶりとなりました（2019年はアウクスブルク市から尼崎市に訪問）。その間は世界的な新型コロナウイルス感染症流行の影響で中止を余儀なくされ、交流が制限されてきました。

今回派遣される使節団員は20歳前後の若い団員たち8人に団長、副団長を含めた10人。団員の中には在住していた、留学経験あり、旅行など海外経験が豊富です。しかし、今回の使節団は単なる観光や視察だけで訪れるのではなく、尼崎市の代表として訪問します。そのため団員たちは6月からアウクスブルクの歴史や先輩使節団員との交流、送別会の出し物の検討等の研修を通じて準備を進めるとともに、団員同士の繋がりを深めてきました。

2. いざ出発

使節団一行は、政策秘書担当の難波係長、若柳さんに引率してもらい、関西国際空港に集合。不安もあるとは思いますが、団員は期待と会話が絶えません。



ドイツまでの長時間のフライトですが、に疲れた様子もみられましたが、空港で出迎えたくれたアウクスブルク市のヤニックさんたちの姿、そして手渡されたおやつで疲れも吹っ飛び、笑顔が戻りました。今回行動をともにする滋賀県長浜市の使節団とも無事に合流しました。初日は、団員がお世話になるホストファミリーとの対面式。



団員はこれから日中の行動が終わると翌朝までホストファミリーと過ごすことになります。フライトの疲れや時差ボケも回復する暇もないまま、一人ひとりの名前が呼ばれ、ホストファミリーの皆さんと挨拶・握手・ハグを交わし次々と引き渡して家路に向かいます。心細くならないのかな、との

心配をよそに、団員は「また明日ね」と笑みを残して去っていきました。

3. ドイツでの経験

アウクスブルク市は、バイエルン州にある人口30万人の街です。ロマンチック街道沿いに位置する街で2000年を超える歴史があります。街にはルネサンス様式の建物が多く、周辺の道路は石畳が敷かれ、美しい街並みです。なかでもアウクスブルク市庁舎の美しさ、豪華さには圧倒されます。残念ながら改修工事のために庁舎内部には入ることができませんでした。



使節団の日程は、アウクスブルク市の職員の方々が計画してくれています。短い滞在期間の中で様々なところに案内していただきました。姉妹都市提携のきっかけとなった“ディーゼル石庭苑”、都市名をつけた“尼崎・長浜通り”、日本庭園が

ある“植物園”、世界最古の社会福祉住宅とされ、現在も年1€で居住できる“フッゲライ”、市民に親しまれている“市場、図書館、人形劇”等々。



公式行事の一つ表敬訪問は、市庁舎の一つロココホールで執り行われました。公務のため市長にはお会いできませんでした。が、副市長から歓迎の挨拶をいただきました。



また民族衣装を試着する体験もさせていただきました（写真には写っていませんが私も試着させていただきました）。そこにはなぜかテレビカメラが・・・なんとTV局が取材に来られており地元で放送されるという、うれしいサプライズがありました。



ほかにも、観光地として有名な“ノイシュバンシュタイン城”、世界遺産“ヴィース巡礼教会”、戦争時の負の遺産ともいえる“ダッハウ強制収容所”、“敷地内の池に鳥居がある”アウクスブルク大学“、“織物博物館“では個性豊かなTシャツをつくり、熱狂的なサポーターが多いFCアウクスブルクの本拠地”WWKアリーナ“では選手のベンチや記者会見場にも立ち入るなど、本当に貴重な体験をさせていただきました。



4. 再会するまで

青年使節団の行程もいよいよ残すところわずかになりました。出発の2日前に開催されたフェアウェルパーティーでは、団員個々で撮影、編集した自己紹介と尼崎市（日本）の紹介、そして映像をみて解答するクイズを盛り込んだ動画です。団員たちはこの日のために念入りに準備をしてきました。当日もリハーサルを行って映像、音声の確認をしたはずなのに・・・。

通信環境の影響か動画がうまく流れません。団員は通信チェック、通訳の方に状況を翻訳してもらうなど対応していました。そんなとき団員の一人が「歌を歌う」と。皆が知っている曲を英語で歌いだしたのです。予定どおりにいかないときも仲間でなんとかしよう、助け合おう、何かできないか、との団員一人ひとりの思いが強く感じられました。本当に心から感動しました。参加された皆さんにも思いは伝わったのではないのでしょうか。



5. 結びに

今回の尼崎市青年使節団は、観光旅行では味わえない貴重な体験をすることができました。団員はホストファミリーと短い期間ではあるものの家族として受け入れてもらい、心温まるおもてなしを受けたと思います。日本とは異なる文化、環境、言葉を実感することで、改めて日本（尼崎市）の良いところ、見習いたいところがみえてきたのではないのでしょうか。

ホストファミリーは、過去に団員として尼崎市に訪れた方々と聞きました。今度は団員たちがアウクスブルク市の団員をホストファミリーとして受け入れます。団員の皆さんがお返しする番です。是非、尼崎市とアウクスブルク市の交流の懸け橋になってもらいたいと思います。最終日にホストファミリーやアウクスブルク市をはじめ、お世話になった多くの方々と別れ、家路に向かう途中、団員たちから「将来は海外で働くことも視野にいれたい」、「もっと語学を磨いて留学を真剣に考えたい」との声を聴きました。数日間の体験が若い人たちの将来を考えるきっかけになったのだとしたら、尼崎市の事業としても意義があるものになったのではないだろうか。そして、団員たちには、その経験を後輩に伝える役目も果たしてもらいたいと思います。

団員は数日間、夢のような体験、経験をしました。でもそうした経験は自分一人で行ったものではありません。一緒に行動した仲間、準備をしてくれた政策秘書担当の方々、受け入れてくれたアウクスブルク市の方々、そしてなにより素敵な機会をくれた家族への感謝の気持ちを忘れないでもら

いたいと思います。

最後に、ホストファミリーをはじめアウクスブルク市の職員の皆さん、独日協会の方々、案内や通訳として同行していただいた皆さん、そして気持ちよく私たちを受け入れてくれたアウクスブルク市の市民の皆さんに心より感謝を申し上げます。また使節団派遣にあたってご尽力いただいた政策秘書担当の皆さま、送り出してくれた小田地域課の皆さまに厚く感謝を申し上げます。結びとします。